

<新刊紹介> 大学評価学会・シリーズ「大学評価を考える」第8巻

# 大学改革と大学評価

蔵原清人 著

2018年10月20日 刊行

発行:大学評価学会/発売:晃洋書房/価格:2,000 円+税 (会員割引あり)

本シリーズ初の単著となる本書は、30年の大学教員の経験をもとに、大学改革の課題に関する諸論考をまとめたものです。1990年代以降の大学改革の意味を振り返り、またこれからの大学評価のあり方を考える基盤を提供してくれるものです。ぜひご一読ください。



## 「大学改革と大学評価」目次

### はじめに

#### 序論 大学と現代社会

#### 一 大学改革と大学評価

- 1.どんな大学評価が大学をのぼすのか
- 2.研究と研究評価について
- 3.地域社会への貢献とは
- 4.大学の役割と組織運営のあり方
- 5.経済界は大学に何を望んでいるか

#### 二 大学評価政策の検討

- 6.大学評価の制度はどうなっているか
- 7.大学はどう設置されるのか
- 8.大学政策の評価をどう行うか
- 9.内部質保障システムをどうつくるか
- 10.大学評価の20年一受審側の経験から

#### 付論 若者の高等教育要求はなにか

#### 参考文献

#### 初出一覧

### 【お知らせ】

2018年12月8日(土)午後に行われる大学評価学会第56回研究会では、著者の蔵原清人氏をお迎えし、本書を基にしたご報告をいただく予定です。ぜひご参加ください。

第56回研究会

日時:2018年12月8日(土) 午後1時半~5時

場所:愛知工業大学 本山キャンパス

3階 講義室 2

(愛知県名古屋千種区東山通1丁目38-1)

### <審査を担当した委員による推薦の辞>

学術、文化の担い手であるはずの大学が経済と政治に翻弄されている今、大学をどのように評価すべきなのか、大学の社会的役割とはいったい何なのか。政財界による大学評価政策の考察から今日の大学のあり様の根底を問う著者渾身の書。

(重本直利氏・元龍谷大学)

大学の評価現場にあって20数年にわたり苦闘しながら関与し、その都度発言しつつ、大学評価政策も相対化して、あるべき大学評価を求めてきた類例のない書である。

(細井克彦氏・元大阪市立大学)

18歳人口の減少と大学進学率の上昇は、大学が学生を選別する時代から選択される時代へとシフトさせた。いま大学は生き残りをかけて急速に変化している。本書は、大学に変化をもたらす外的因子や内的因子、そして大学の存在意義や機能などを教育政策の視点から深掘りしている。変化し続ける社会の中で、大学が機能を発揮するためには、社会は大学改革や評価にどう関わることが正解なのか、読者にそのヒントを与える一冊である。

(小山由美氏・日本大学)